

③ 燃料タンクから漏れていた燃料に着火し、炎上

概要：C航空所属ボーイング式737-800型機は、平成19年8月20日、那覇空港に着陸したが、41番スポットに停止した直後、右主翼燃料タンクから漏れていた燃料に着火、炎上し、機体の一部を残し焼失した。
同機には機長ほか乗務員7名、乗客157名（うち幼児2名含む）の計165名が搭乗していたが、死傷者はいなかった。

非常脱出までの経過

10時31分57秒

同機は41番スポットで停止した

10時32分53秒

第2エンジン後部付近において火災が発生し、右主翼前縁と第2エンジン下のエプロンに広がった

10時33分05秒

整備補助者が、インターホンを通じて火災発生を機長に通報した

10時33分52秒

機長は客室乗務員に脱出準備を指示した

10時34分24秒

乗客が脱出を開始した

10時36分06秒

乗客・客室乗務員の脱出が完了した

10時36分11秒

右主翼で1回目の爆発が起きた

10時36分20秒

機長が非常用ロープを使用して操縦室右側窓から脱出した



脱出の状況

- 死傷者はいなかった
- 脱出に要した時間は2分28秒であった
(10時33分52秒～10時36分20秒)
- 使用した脱出スライド数は6箇所中4箇所であった
- 脱出スライドの着地付近に補助者がいたと証言する者は約25%であった
- 荷物を持って脱出した者は約60%で、脱出の際、客室乗務員から荷物を持っての脱出を制止されたと証言する者はいなかった

死傷者がなかった要因

火災規模が大きく、消火活動の開始が遅れたにもかかわらず、死傷者がなかった要因は次のとおりであると推定される

- 乗客がスポットイン直後から降機準備を開始して機内通路に並んだ状態であったため、整然とした脱出が可能であった
- 燃料漏えいが疑われる異常事態が発生していたことを地上係員が早期に気づき、機長にその旨通報した
- 同機の脱出口の位置が比較的低く、また昼間で天候が良好であったため、乗客の脱出が容易であった
- 地上係員が自発的に脱出スライド下につき、脱出者の援助に当たったため、円滑な脱出につながった
- 駐機した後の火災発生であったため、火災発生の認識、通報、脱出、脱出支援が円滑に実施できた
- 両隣の駐機場が空いていたため、他機に被害が及ばなかった
- ブリッジ式の乗降ではなかったため、ブリッジやターミナルに被害が及ばなかった

本事例の調査報告書は当委員会ホームページで公表しております。

(平成21(2009)年8月28日公表)

<http://www.mlit.go.jp/jtsb/aircraft/rep-acci/AA2009-7-2-B18616.pdf>